

カルチャーショック

アメリカ合衆国での医療経験

KANEMATSU TAKASHI
兼松 隆之

がんの告知率は約20年前には洋の東西で大きな差があった。最近の我が国におけるがん告知に関するアンケート結果では患者側はがんが早期、進行期のいずれであっても告知を望むものが86%、71%であるのに対し、告知に賛成する医師は早期がんの場合67%、進行がんの場合16%と報告されている。この数値については種々の見解があるだろうが、我が国においてもがんの告知率が高まっていることは間違いない。一方、米国では1960年代のがん告知率は10数%であったにもかかわらず、1971年の統計では91%、1979年には98%との報告をみる。

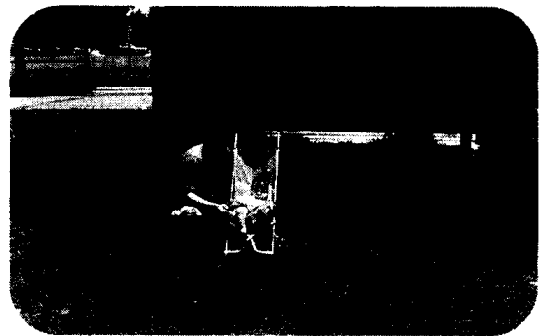
私は1970年代の終り頃、米国ノース・カロライナ州ニューハノーバー病院で外科病棟に勤務した。その際、忘れられない出来事があった。私は乳癌のために手術を行った中年の女性を担当した。術後、放射線療法や制癌剤による化学療法などの追加が必要か否かは、切除標本を検索した上でリンパ節にがんの転移の有無で決定することになっていた。すなわち、リンパ節にがん転移があると病気がかなり進行しているものと判断され、上記治療がなされることになるわけである。その判定が下される日、私が彼女の病室を訪れると、私の指導医がすでに彼女の所に来て結果を告げて帰ったところであった。私は彼女に「それで結果はどうでした？」と尋ねた。彼女は微笑みながら答えてくれたが、私はその意味が充分理解できていなかったがその時の彼女の雰囲気からしてリンパ節へのがん転移はなかったものと思い込んで「それはよかったですね。おめでとう。」と私は述べた。すると彼女はいたずらっぽくそして半分怒ったような口調を作って「あなたは何てひどいことをいうの。先生はリンパ節にがんの転移があったから、明日、化学療法の専門医に来てもらいますのでよく相談して下さいといっていたわ」と詳しく説明してくれた。私は当時、医学部卒業7年目で日本での臨床経験もそれなりにあったが、1970年代の日本ではがんの告知は一般的でなく、ましてや進行がんの告知の経験は皆無であった。そのような背景と英会話力の未熟さが招いたことであった。私は平謝りに謝ったが、彼女は私のことをよく理解してくれた。それからは、以前にも増して彼女の部屋を訪れ、家族

連載第5回



のこと、カレッジバスケットのことなどにも花が咲いた。

今では我が国でもがんの告知についても考え方が以前とは大きく異なり、積極的に行われるようになってきた。その論議を耳にする時、私は彼女のことを思い出す。あれから20年たらずの年月が過ぎた。米国東南部の田舎街で彼女が健やかでいてくれれば幸いである。
(留学生指導主事・医学部教授)



ニューハノーバーメモリアル病院前にて

海外雑感

MORINAGA HARUNO
森永 春乃

<その1>初めての海外渡航はもう25年前、南米であった。慢性のインフレ状態にもかかわらず、人々は陽気でワインを楽しみ、サッカーに興じ、道端の物乞いさえ、声高らかに歌って幾ばくかの金銭をねだった。働く人々は決して勤勉とはいえない。当時日本はまさに高度成長期の真只中、つい比較し、これじゃ当分経済発展は遅れるだろうなどと考えたりした。しかし何か魅力を感じるものがあった。日本人は“小人閑居して不善を為す”と云って働く事、勤勉であることを徳とし、働き続けて世界の経済大国となった。しかし人生を楽しむ術を天性の如く持つ南米の人々には負ける。はかり知れない魅力を感じたのはそこかもしれない。

数年後そのルーツを辿りスペイン、ポルトガルへ向かった。

＜その2＞旅慣れない頃はやたらと荷物が多い。気候や場所柄を考え、特に衣服が増える。女性の場合特にそうだ。しかし海外で見かける人々は様々だ。日本のように一斉に半袖になることはない。電車の前に坐った二人、Tシャツ、片や毛皮という例もある。要は他人の目ではない。自分が心地よければ。ハッとする程きれいなパリジェンヌが骨が折れ半分ダラリと垂れ下った傘をさしていた。似合わないなあ。いや、いいんだ、他人に迷惑をかけてるわけじゃない。一人で納得した。

＜その3＞ベルギーのある高校の先生のお宅にホームステイをした。無駄な物がない家だった。夕方の一定時刻になると小さい子供達が居間に並んで坐った。父

親がやおら戸棚をあけてテレビを取り出した。スイッチを入れ子供達は人形劇か何かの番組を楽しんだ。30分程で終わると父親はパンパンと手を打ちテレビは再び戸棚の中にしまわれた。子供達は満足げであった。

＜その4＞ニューヨークっ子の人気のステーキハウスはその日も混み合っていた。先程より、パンの取り皿を、ワインのおかわりを、何度頼んでもウェイターは返事ばかりで持って来ない。忙しそうだからもういいですよと私は同行したM・ロンドン夫人の袖を引いた。「言う事は言わなければ。ここはアメリカよ」と彼女は言った。マネージャーが出て来て名刺を差し出しながら「悪かった。次は私が応待します」と。一人前ゆうに1ポンドはあった食べ残したステーキをドギーバッグに包んでもらいその店を出た。

(留学生指導主事・経済学部講師)

私の日本人論 (第5回)

日本は素晴らしいか？

YAMAZI HIROAKI
山路 裕昭

教育学部では、教員研修留学生制度に基づいて、主として発展途上国から小・中・高校の現職教員や教育関係者を毎年2～3名受入れて、1年間の研修の機会を提供している。受入れを始めて既に10年あまりを経過し、制度としては教育学部にはほぼ定着していると言えよう。

理科教育を専門とする私も、縁あって、これまでに3名の教員研修留学生の指導を担当してきた。また、私の所属する理科室全体でも、これまでに10名あまりの現職理科教員を留学生として受入れており、今年度も2名の留学生を受入れている。

ところで、理科関係の教員研修留学生から、これまでに何度か次のような決意(?)を聞いたことがある。それは、「日本は経済的に繁栄しており、その理由の一つは、高度に発達した科学技術である。」「日本の科学技術が素晴らしいのは、日本の理科教育が素晴らしいからであろう。」だから、「日本の進んだ科学技術と理科教育を学び、母国の発展に貢献したい。」というものである。

わが国の理科教育関係者の一人として、これは誇っていいことであろうし、おおいにわが国の科学技術や理科教育について学んでいただきたいと思う。だがし



ゼミ室にて(最後列が筆者、前列左から2番目が
ミヤマのミヨウさん)

かし、そうは思うものの、留学生のそのような発言を聞くにつけて、何か欲求不満と一抹の不安を覚えるのも事実である。

我々日本人は、わが国の科学技術を本当に誇れるのか？わが国の科学技術は、人類の幸福に本当に貢献してきたのか？わが国の理科教育は、真に子どもたちの成長・発達に貢献しているのか？入学試験のための理科教育ではなかったと、断言できるだろうか？……

わが国の科学技術や理科教育に対する留学生の熱い思いを目の前にして、にこやかに微笑むと同時に、心の中に割り切れないものがある。

日本の良いところだけでなく、悪いところも見てもらいたい。過大評価でも過小評価でもなく、正当な評価をしてもらいたい。これは、多くの日本人の正直な気持ちであろう。そして、それを留学生に求めることが、案外に難しいのである。否、私たち自身も、自分の目、自分の心で、さまざまな事象を正當に評価することが、実は出来ていないかもしれないのである。

(教育学部助教授)